

出題のねらい

㊦は、小川糸の短編集『あつあつを召し上がれ』の中の一編です。平易で読みやすい文章ですし、題材も祖母との心の交流や家族という身近なものですから、比較的やさしく取り組めたと思います。ここでは、主人公マユをはじめ登場人物の心情を問う問題を多く出しました。また、小説などを理解するには「象徴」ということが重要な鍵になりますので、そこにも目を向けてもらう問題にしています。

問題を解く際には、何が問われているのか「問い」をしっかりと読むこと、記述式問題が増えてきていますから、簡潔で分かりやすい文を書くよう普段から訓練することなどが重要になってきます。

㊦は、『竹取物語』のかぐや姫が天上世界に帰る前の場面からの出題です。文章そのものはそう難しくはありませんが、登場人物が何人いるのか、誰がどこを話しているのか、どういう思いでいるのかなどをなるべく正確に読み取ることが求められます。敬語などに注目して文章の主語を明らかにし、さらに何を言ったのか(行ったのか)をはっきりさせながら読んでいくことが大切です。

㊦

【解答】(50点)

問一	a 幹線	b 渋滞	c 交互	
	d 保管	e 威厳		(各2点×5)
問二	B			(4点)
問三	バーバの体が変化していくようで怖かった			(4点)
問四	ア			(4点)
問五	死			(4点)
問六	ウ			(4点)
問七	(1) イ			(4点)
	(2) 祖母が亡くなる前に、もう一度幸せだったひとときを思い出して、それに浸って欲しかったから。(44字)			(6点)
問八	エ			(4点)
問九	祖母が死んでしまったのではないかと思い、不安になったから。(29字)			(6点)

【解説】

問一 書き取りは、「a 幹線」「e 威厳」の出来が2～3割とよくありませんでした。誤答として目立ったのは、aの幹を環に、eの威を偉にするものです。a・e以外は7割程の出来でした。

問二 大変よくできていました。「体が、風の一部になってしまいそうだった」というのは、「(自転車で)猛スピードで走っている」ことの比喩に最も相応しい表現ですから、Bが正答です。

問三 6割ほどの出来でした。誤答としては「長い行列ができている(から)」の部分抜き出したものが目立ちました。これは「このまま待っていたら、夜になってしまう」と考えたことの外的理由ではありますが、問いは「マユが焦っている」のはなぜかと聞いています。マユの気持ちの理由(内的理由)を答える必要があります。問い方にも注意し、何が求められているかを考えて解答しましょう。

問四 よくできていました。この前後は、今まで禁句にしていた「死」という言葉を口に出したために、祖母の死が現実のものとして立ち現れ、マユの気持ちを混乱させているところです。誤答としては、ウという答えがやや目立ちましたが、多くの人の前で大きな声を出し緊張しているというような表面的な受け取り方では、この場面のマユの気持ちが理解できていないということになります。

問五 よくできていました。2行前の「祖母がもうすぐ死にそうなんです」にその文字はあります。

問六 よくできていました。なぜ「うやうやしい」という言葉を使ったのか、その理由を問う問題です。「相手を敬って礼儀正しくふるまう様子」という語義と文脈を考え合わせれば正答を導けると思います。

問七 (1) 祖母が富士山と呼んだかき氷は、家族の思い出がつまった特別なものでした。富士山という名のかき氷が、ここでは何の象徴であるかを問う問題です。大変よくできていました。誤答としてはエが目立ちました。たしかに祖母の富士山という言葉はマユとの間にだけ通じる言葉であったかもしれませんが、秘密であるとか合い言葉であるとかいうようなことは本文には書かれていませんので、正答とは言えません。

(2) 「どうしても届けなければならない」と思った、マユの気持ちを問う問題です。富士山の象徴性がわかれば、祖母に何を届けたかったかがわかるはずですが、ここでは、祖母が亡くなる前ということと、幸せのひとときを味わってほしいという趣旨のことが書けていれば正答です。「祖母が欲しかったから」とか「祖母にとって必要だから」という解答がありましたが、(1)における「答えを考え合わせて」いないことと、なぜ欲しがするのか・必要なのか

一般入試／国語(中期)

が書かれていないので大きく減点になります。また、趣旨は押さえられていても、わかりにくい文章は減点しました。記述式では、文意が通じるかどうか採点の対象になりますので、誤解される可能性がないかどうかチェックするようにしましょう。

問八 登場人物の気持ちは、いろいろな思いが複雑に重なっていることが多いものです。ですから、ここでは明らかにママの気持ちではないものを選んでもらいました。大変よくできていました。

問九 マユの心情の理由を問う問題です。祖母が死んでしまったのではないかと思ったということが書いていれば正答にしました。大変よくできていました。



【現代語訳】

八月十五日も近いころの月になって、縁側近くに出て座り、かぐや姫は、たいそうひどくお泣きになる。今はもう、人目もかまわずお泣きになる。これを見て、親たちも、「いったい、どうしたのです」と騒いでたずねる。かぐや姫がなくなると言うには、「前々から申し上げようと思っておりましたが、申し上げたら必ず心を惑わしなさるであろうと思い、いままでは黙って過ごしてきたのでございます。でもそういつまでも隠しておくこともできまいと思ひ、打ち明けるのです。私の身は、人間世界のものではございません。月の都の人なのです。それなのに、前世の宿縁によって、この世界に参上したのでございます。でも、今はもう帰らねばならぬ時になりましたので、この月の十五日に、あの以前にいた月の国から、人々が迎えに参上するであります。避けることができず、どうしても行ってしまわねばなりませんゆえ、あなた方がお嘆きになるのが悲しいことですので、この春以来、私もそれを思い嘆いていたのでございます」と言い、ひどく泣くのを、翁は、「これはまた、なんということをおっしゃるのですか。竹の中から見つけてさしあげましたけれども、その時はわずかにカラシナタネほどの大きさでいらっしやうたのを、いまでは私の身の丈がならぶほどまでにお育て申し上げた私の子を、だれが迎え申し上げられましょうか。ぜったいに許せません」と言って、「もし、そんなことになるのなら、私の方こそ死んでしまおう」と言って、泣き騒ぐのを見ると、ひどくこらえかねる様子である。かぐや姫が言うには、「私は、月の都の人として父母があります。わずかな間だと申して、月の国からやってまいりましたが、このようにこの国において多くの年を経てしまいました。あの月の国の父母のことも覚えておりません。この地上では、このように長い間滞在させていただいて、お親しみ申し上げました。ですから、故郷に帰るのがとても嬉しいという気持ちはありません。ただ別れるのが悲し

いだけです。でも、自分の気持とは関係なく帰ることになるでしょう」と言って、翁と姫と一緒にひどく泣く。使用人たちも、何年もの間慣れ親しんで、気だてなども高貴でかわいらしかったことを見なれているので、別れてしまうことを思うと、恋しい気持がこらえきれそうもなく、湯水も喉に通らないありさまで、翁、姫と同じ心で嘆きあうのであった。

【解答】(50点)

問一	a イ	b ア	c イ	
	d イ	e イ		(各2点×5)
問二	A イ	B ア	C イ	
	D エ	E ウ		(各2点×5)
問三	エ			(3点)
問四	② き	③ こ		(各2点×2)
問五	イ			(3点)
問六	私の方こそ死んでしまおう。			(3点)
問七	月の都・(かの)もとの国			(各2点×2)
問八	まかり			(3点)
問九	帰るのがとても嬉しいという気持ちはない。 別れるのが悲しいだけだ。しかし、自分の気持とは関係なく帰ることになるだろう。(59字)			(8点)
問十	ウ			(2点)

【解説】

問一 敬語の敬意の対象を問う問題です。尊敬語は文章の主語、謙譲語は目的語にあたる人に対する敬意となります。aの「泣きたまふ」は尊敬語で、この文章の主語は「かぐや姫」ですのでイです。bの「かならず心惑はしたまはむ」も尊敬語で、主語は「親ども」ですのでア、c「のたまふ」も尊敬語で、主語はかぐや姫なのでイ、d「きこえ」は謙譲語で、ここは翁がかぐや姫を竹の中から見つけ申し上げるという意味なので敬意の対象はイ、e「たてまつり」も謙譲語で、翁と姫がかぐや姫を養い奉るの意味なので敬意の対象はイ。尊敬語と謙譲語が文章の何に対する敬意かを理解し、その文章の主語や目的語が誰かを確認しながら読めば、比較的難しくありません。わりあいよく出来ていました。

問二 文章の主語が誰かを問う問題です。これは文脈をきちんと読み取り、誰がどのような行為を行っているかを考えなければなりません。その際にヒントとなるのが、問一でも問うた敬語です。敬語が付いていれば、身分の高い人が主語となります。Aは「まか

る」、B「思し嘆かむ」、C「思ひ嘆く」は、いずれもかぐや姫の発話の中に登場します。しかもAは謙譲語、Bの「思す」は「思ふ」の尊敬語、Cは「思ひ嘆く」には尊敬語はありません。そうなれば、Aの主語はイとなり、Bはア、Cはイとなります。Dはその会話文の前に「翁」とあるのでエ。Eの「見慣らふ」を含む文章の主語は最初に「使はるる人」とあるのでウです。ACDは比較的良好に出来ていましたが、BとEはよくありませんでした。BとEの正答率は3割程度でした。

問三 文章の解釈を問う問題です。「うちいづ」は「うち」は接頭語、「いづ」は「出す」の意。何を出すのかと言えば、この後で自分の素姓と、どういう経緯でここに来たのかを説明しているので、アの「出てきた」ではなく、ウ「帰る決心をする」でもありません。イの「お話する」かエの「打ち明ける」です。さらに、「さのみやは」は前文の「さきざきも申さむと思ひしかども」(前々から申し上げようと思っていたけれども)できなかつたことを指しますから、エ「そういつまでも隠しておけまいと思って、打ち明ける」の意味となります。比較的良好にできていました。

問四 「来」の活用形から読み方を答える問題です。「来」(カ行変格活用)の動詞は未然形「こ」連用形「き」終止形「く」連体形「くる」已然形「くれ」命令形「こ・こよ」です。②は「来」に完了の助動詞「たり」が付いていて、「たり」は連用形に付くので「き」と読みます。③は「来」に推量の助動詞「むず」が付いていて、「むず」は未然形に付くので「こ」が正解となります。出来ている受験生は両方でできていましたが、出来ていない受験生は両方とも出来ていませんでした。

問五 空欄補充問題です。選択肢を見れば明らかなように、陳述の副詞(呼応の副詞)を問う問題です。陳述の副詞とは、特定の表現と対応する副詞です。「よも」は、下に打消の助動詞「じ」を伴い、十中八九そういうことは起こるまいの意味。「まさに」は反語の助詞を伴って「どうして～だろうか」、「べし」「む」を伴って「きっと～だろう」の意味。「かならず」は下に打消・反語表現をとまって「かならずしも」の意味。「すべからく」は下に「べし」を伴って、「当然するべきこととして」の意味となります。ここは、反語の「や」を伴い、迎えの人が来ても、どうして許すだろうか(いや許さない)の意味なので、イの「まさに」が入ります。正答率2割程度で、あまり出来ていませんでした。多かった間違いはウでした。

問六 口語訳を問う問題です。「我こそ死なめ」でポイントとなるのは、「こそ～め」の係り結びと、助動詞「め」の意味を正確に取れるかどうかです。「め」の終止形は「む」で、意思を表します。そうすると、「私こそ死のう」「私こそ死んでしまおう」のように、私を強調しながら、意思の意味が入らないと正解にはなりません。きちんと正解できたのは2割程度でした。

問七 「かの国」と同じことを指す内容を本文中から抜き出す問題です。「かの国」はかぐや姫がこれから帰っていく先のことですから、「月の都」、「(かの)もとの国」が正解となります。これは概ね出来ていました。

問八 字数制限の中で口語訳を問う問題です。字数は60字で、かつ評価のポイントは、「いみじからむ心地」と「悲し」の内容、および「心ならず」と「なむ」の意味が分かるように口語訳することです。「いみじ」は注にある通り程度がはなはだしいことを言います。何の程度がはなはだしいかという、月に帰ることに対して「嬉しい」という気持です。月の都には父母がいるけれど、覚えてはいない。こちらに長く居て慣れてしまったので、月に帰ることがとても嬉しいわけではないのだというのです。よって「悲しい」のは月に行くことではなく、こちらの人々と「別れる」のが悲しいと言っているのです。しかし、「心ならず」即ち「自分の気持ちとは関係なく」、「まかりなむとす」即ち「退出する(帰る)ことになるでしょう」というのです。この4箇所がきちんと理解出来た人はごく少数でした。特に「いみじからむ心地」の意味を正確に取れている例が多くありませんでした。正答率は2割程度です。他は3～4割程度の正答率でした。

問十 文学史の問題です。『竹取物語』が成立したのは平安時代です。とすると、平安時代に作られた「作り物語」を選ばなければなりません。ア～エの中で、平安時代に成立したのはア『伊勢物語』とウ『落窪物語』ですが、『伊勢物語』は「歌物語」と呼ばれる物語です。よって正解はウ。アと間違え例が圧倒的に多かったようです。平安時代に成立した物語ということでアと答えたのでしょうか、「作り物語」というところを読み飛ばしてしまったようです。注意しましょう。